足立区長賞

「税金は牛乳だ」

足立区立　新田中学校

三年　坂本　悠朱

「優しさが飲み物だったら、それは牛乳だ。」先日、ＣＭで流れたこの言葉が、私の頭に強く残りました。牛乳は、成長期に欠かせない栄養を蓄え、私たちの体を内側から静かに支えてくれる存在です。そのとき、ふと「税金もまた、社会という大きな体を育てる牛乳のようなものではないか」という考えが頭をよぎりました。目には見えにくいけれど、社会の隅々にまで行き渡り、私たちの生活を支えているからです。

先日、祖母が自宅の階段で転倒し、親指を骨折してしまいました。私はその場にいませんでしたが、母から「救急車がすぐに駆けつけてくれて、本当に良かった」という話を聞きました。激しい痛みの中で不安だった祖母を、迅速な救急搬送と医療が支えてくれたのです。その話を聞いたとき、私は「当たり前」だと思っていた日常の裏側に、ある仕組みがあることに気づきました。祖母を救った救急車や、高度な医療設備、そして懸命に働く隊員の方々の活動。これらはすべて、私たちが普段意識することのない「税金」という栄養によって維持されています。もし税金という仕組みがなければ、祖母はあのような迅速な助けを得られなかったかもしれません。

牛乳が骨を強くするように、税金は社会の「骨格」を形成しています。税金は、特定の誰かのためだけにあるのではありません。

私たちが、病気やけがをした時に医療を受け、安心して暮らせる。その「当たり前の日常」という健康な体は、税金という栄養が社会全体に行き渡ることで維持されています。

「税金は負担だ」という声を聞くこともあります。しかし、それは単なるお金のやり取りではなく、社会という大きな体を維持するために必要なものです。牛乳が牛を育て、しぼり、運ぶという多くの人の手によって届けられるように、税金もまた、多くの人の労働と協力によって集められ、社会に還元されています。この循環こそが社会の可能性を広げるための、なくてはならないエネルギーなのだと確信しました。

「税金は牛乳だ。」この比喩は、私に税の本当の役割を教えてくれました。それは、社会という大きな家族を育むための、温かい支え合いの形です。祖母を救ってくれた社会の仕組みに感謝し、その恩を忘れないようにしたいです。将来、私が社会人として税を納める立場になったとき、私は「負担」としてではなく、「社会という体を健やかに育てるための栄養」を届けるという誇りを持って、その役割を果たしたいです。この栄養を絶やすことなく、誰もが安心して暮らせる未来を、次の世代へとつないでいきたいと思います。